

フランス中等教育制度の成立過程についての一考察

宮 脇 陽 三

内容目次

- 一 フランス中等教育制度成立前史
- 二 革命期における中央学校の設置
- 三 執政官政府時代における中等教育制度
- 四 帝国大学学校教育団体の設置
- 五 第一帝国政府時代における中等教育制度

一 フランス中等教育制度成立前史

一七五〇年頃のフランス中等教育機関は三世紀間にわたって、宗教団体イエス社によって管轄されていた。イエス社教団は約一〇〇校の中等学校コレージュを設置し運営していた。これらの中等学校は社会各々から好評を得ていた。イエス社教団以外にも、オラトワール教団中等学校、大学付属中等学校、司教管区所轄の中等学校が経営されていた。

当代の小学校にはまだ民衆の一部の子弟しか通学していなかった。さらに高等教育機関としての大学は世間から無

視され沈滞していたのである。それにもかかわらず中等学校は全国の到る所で活発に活動していた。このような状況は、一九世紀の八〇年代に初等教育と高等教育が全面的に改革されるまで継続したのである。

これらの教団関係中等学校の設置母体は教会であり、また教育課程における「ラテン語の優位」(7, 9-10)というところが共通の特質であった。とりわけナントの勅令の廃止後では、聖職者が中等学校経営の主導権を握っていたのである。たとえ教員の一部が在俗者であったとしても、校長職はつねに聖職者によって占められていたのである。

中等学校における主要教科はラテン語であった。もちろん一八世紀の啓蒙時代にフランス語は大いに発達したが、中等学校の授業用語としてはフランス語よりもラテン語が幅を利かせていたのである。フランス語以外には歴史と自然科学が教育課程に顔を出し始めていた。しかし中等学校における授業時間の大半はラテン語科に配当されていたのである。オラトワール教団中等学校においては、生徒は教室の中でラテン語の使用を強制されはしなかったが、教育課程においてはイエス社教団中等学校と同じように、仏文ラテン語訳とラテン語講読、ラテン語詩文が主要教科目として君臨していたのである。

ギリシャ語教科はギリシャ語専門教師の数がきわめて少なかったことと、生徒もあまり関心を示さなかったことから、あまり活発には指導されなかった。

哲学教科は大哲学者の学説が紹介され説明された。哲学教科の指導目標は生徒の宗教的信仰を強化することであり、権威主義的傾向の授業が行われた。

歴史教科では、古代史が主要領域であった。近代史ではフランス史だけでなく外国史も含まれていた。

自然科学教科は完成学年の修辞学学級まで、数学に限定されていた。数学以外の自然科学については、哲学学級と

物理学学級（哲学学級第二学年）に在籍の少数の生徒だけが履修した。近代外国語の系統的な学習指導はまだ行われていなかった。

それゆえ当代の中等学校では、ラテン語を中心とした古典語教育がイエス社教団やオラトワール教団に所属する聖職者教師によって指導されていたのである。生徒はラテン語の偉大な著作家の作品の美を理解するために学習した。仏文ラテン語仏訳は生徒のフランス語学力の向上に寄与したのである。

ラテン語を中心とする文学教育の指導目標は、生徒の想像力を活発にするとともに、心情を豊かにするものを鑑賞できるようにすることであった。教師は文学における美的価値の探究に専念したのである。そのような文学教養を身につけた人は、世人から尊敬の眼で見られた。教師はどんな普通の才能の生徒に対しても周到な指導上の配慮のもとに、落ちこぼれないように指導したのである。

当代のラテン語古典文学優位の中等教育に対する批判も見られるのである。有名な女子教育家フェヌロン (Fénelon, F., 1651—1715) の友人フルリ牧師は、『学習の選択と方法』（一六八六年）の中で当代の中等教育の欠陥を指摘したのである。一八世紀になると、ダランベール (D'Alembert, J., 1717—1783) は啓蒙期の代表的事業である「百科全書」の中の「コレージュ」の項目において、当代の中等教育における科学教育の不備を非難した。事物よりも言語に関心を持ったり、啓蒙期の自然科学の進歩に眼をつむったままの教師は非難されるようになったのである。ルソ— (Rousseau, J. J., 1712—1778) もまた『エミール』の中で当代の教育のあり方を非難している。

一七六二年のイエス社教団追放措置は中等教育改革運動に拍車をかけることになった。とりわけ高等法院はイエス社教団に代って、中等教育の主導権を握ろうとしたのである。ラ・シャロット (La Chalotais, L., 1701—1785) は『国

民教育論』の中で、国家にのみ服従する教育を要請した。かれは、一〇歳以下の児童は近代史、実物教育、算数、フランス語を学習すること、また一〇歳以上の児童生徒は古典語、現代外国語、フランス語を学習することを要望している。それと同時に身体運動によって身体を陶冶し、論理学によって批判精神を養い、倫理学は宗教的信仰とは直接には関係しないが性格を陶冶することとされたのである。

中等教育改革における緊急の問題は、イエス社教団が放棄した中等学校の教師募集問題であった。高等法院と地方公共団体、また司教は活発に教師募集に動いた。教育事業教団、司教管区聖職者、大学関係教師などが応募した。これらの教師は伝統的な教育方法で養成された人であり、なによりも家庭の親の信任を得ることに汲々としていた。そのためイエス社教団関係の旧教師と同じように、ラテン語で授業を行ったのである。

かくして中等教育がイエス社教団の影響から解放されるやいなや、大学は旧イエス社教団中等学校の校舎を接収して、旧イエス社教団風の中等教育を継続することとなったのである。唯一つの例外校はサン・ジェルマン伯爵が設置した陸軍士官学校であって、そこでは新興の科学を尊重する教育方針のもとで運営されたのである。

二 革命期における中央学校の設置

革命期の議会は多数の公教育計画を策定した。とりわけコンドルセ (Condorcet, M., 1743—1794) の『公教育計画』は有名である。しかし国民公会は旧中等学校をすべて閉鎖し、中央学校を開設するまでの数力年間にわたって、中等教育の空白時代が続いたのである。

革命期までの中等学校は、まったく貴族階級子弟の教育施設であって、国家の給費による援助が途絶えてからは、自費で賄うことのできない貧困家庭の子弟にとっては、中等学校は近寄り難い所になってしまっていたのである。

革命期の教育行政家ラカナル (Lakanal, J., 1762—1845) の教育観によれば、(一) 祖国の栄光と人間精神の進歩のために、青年市民は適材適所で、その才能の飛躍が図られなければならない。(二) 財産の如何にかかわらず、市民はそれぞれの才能を十分に伸ばしうるものでなければならなかったのである。

このような趣旨のもとに、ラカナルは、一七九五年二月二五日の法令において、これまでの中等教育施設である大学所属^{ユレージユ}学寮に代るものとして、中央学校 (école centrale) の新設を提案したのである。ラカナルによれば、「この学校をわれわれが中央学校と名づけるのは、それが各県の小学校の中心に建設され、すべての被教育者が入学しやすいように設置されるからである。」(9, 155) すなわち、中央学校は各県の中央に設置されて、いずれの小学校からも進学しやすいようにして、中等教育施設に対する通学距離によって生ずる不公平を、できるだけ減らそうとしたのである。

中央学校の教育内容について、トラシは、「旧中等^{コレージュ}学校では哲学と文学しか教授されなかったが、新設の中央学校の教育課程は、(一) 言語・文学部門、(二) 物理学・数学部門、(三) 道德学・政治学部門の三部門から構成され、各部門は精神陶冶に緊密な関係をもたなければならぬ」(2, 15) と述べている。

中央学校の教育課程は、第一期 (二カ年) が図画、博物学、ラテン語、現代外国語、第二期 (二カ年) が数学、実験物理学、実験化学、第三期 (二カ年) が一般文法、歴史学、法律学、文芸学というように区切って教授されたのである。

中央学校は革命期という混乱した時代の産物であるから、新興有産市民階級からはあまり好意的な眼では見られていなかったのである。それでもいくつかの中央学校は図画教育などによって成功を収めたのである。大多数の中央学校は運営資金の不足と、無給教員の生活苦という問題に悩まされた。そのうえ中央学校は中等教育の半分しか行わなかったで、行き詰まったのである。中央学校は一二歳以上の生徒の入学を許可した。それゆえ児童が一二歳になるまでは家庭の中で家庭教師を雇って教育しなければならなかったのである。中央学校は通学生だけを収容することになっていたので、寄宿生にすることを望んでいた親を困らせることになった。もちろん、このような問題は、政府が適切な財政措置をとれば克服されたかもしれないが、政府は中央学校の育成と振興に対して積極的な熱意を示さなかったのである。

ジャコバン党主導のもとに新設された中央学校は、革命後の新しい社会状況と旧フランスの政治的伝統との和解を図り、カトリック教会の支持を得ようとしていた当代の政府にとっては決して望ましい学校ではなかったのである。なぜなら中央学校は、教育課程における名誉ある地位を、それまでのラテン語から新興の科学と図画に明け渡してしまったために、革命期の激動が一時小康状態になって、なによりも休息と安定を求めている社会に対して、無用の混乱を惹き起してしまったからである。

三 執政官政府時代における中等教育制度

執政官政府（1795—1799, 1799—1804 A. D.）の中等教育政策は慎重な姿勢を示した。事態の急激な変革よりも現

状態維持を図るために、まず中央学校を存続させる方針を取ったのである。パリの中央学校の三校は、とりわけ多大の教育的成果をあげていたので、中央学校予備課程の新設によって補強されたのである。

一八〇一年のセーヌ県会のシャプタル報告書に記載されている中央学校教育に対する要望事項(7, 18)は、(一)国家主導の教育事業であること。文部大臣が専決指揮し、教師は法規を遵守すること。(二)生徒は給費制度のもとで平等に学業に精進すること、(三)所定の系統的な教育課程に準拠した学習指導を行うこと、(四)宗教を教育の基礎とすることなどである。

一八〇二年の法律は中央学校を廃止し、それをリセと中等学校エコール・セコンダールの二種類の中等教育施設に区分することになった。中等学校は国家による認可を必要としたが、地方公共団体または私人が設置する学校である。公立中等学校コレージュ・パブリックはその後公立コレージュと改称されることになった。私立中等学校は私人設置の学校である。これらの中等学校の教育課程はラテン語、フランス語、地理、歴史、数学であった。

リセ(Lycée)は国立中等学校であり、高等裁判所設置数と同数だけ設置された。リセの語源であるギリシヤ語のリュケイオンはアポロン・リュケイオスに捧げられた古代ギリシヤの体操場であり、哲人アリストテレスが学塾を開いた場所である。フランスの代表的な中等学校であるリセの名称は、当代の中等教育における「ギリシヤ・ラテン古典語教育優位」(8, 596)の状況を反映しているのである。

革命期の国民公会によって設置された中央学校は、科学優位の学校であったが、ナポレオンの教育への期待に応じうるようなものは、何もなかったのである。それゆえ、中央学校はリセに衣替えされ、旧制度下の大学人文学部学寮アンシエンス・レターム・コレージュの組織、内容、方法に復帰したのである。科学はたんに軍事的な授業の中にのみ辛うじて生き残ったにとどまり、

「ラテン語は以前のような優越性を回復した」(1, 169)のである。なおリセは一八一五年には王立^{コレージュ・ロワイヤル}中等学校と改称されたが、一八四八年には元のリセという名称が復活し、一九七五年のアビ改革によって五・四・三制の単線型の後期中等学校の名称として今日に到っているのである。

リセにおける国庫負担の寄宿給費生六、四〇〇人中の二、四〇〇人分は、職業軍人、官公吏またはフランスに合併された行政区に一〇カ年間居住の市民の子弟に割当てられた。残りの給費生定員四、〇〇〇人分はリセ生徒八、〇〇〇人中から試験によって選定された。なおリセは授業料自己負担^{ペンスヨネル・ペイヤン}寄宿生八〇〇人と、同数の自宅通^{エフ・スデルタ}学生八〇〇人も収容することになっていた。しかしリセの草創期においては授業料自己負担寄宿生はまだ入学しておらず、在学生徒全員が無償給費生であったから、政府にとって国立中等学校は莫大な経費のかかる学校であり、なんらかの打開策を必要としていたのである。

当代の国会の教育政策は、リセを旧中央学校の教育を改善する学校であるとともに、国家に中等教育の独占権ではなくて監督権だけを留保しておくということであったのである。全国のリセはラ・フレーシュの陸軍幼年学校、つまり旧コレージュ・ド・ルイ大王校を模範として組織されることになった。旧コレージュ・ド・ルイ大王校はシャンパーニュ校長の不屈不撓の意志力と弾力的な経営方針によって、革命期の激動の中を切り抜けて生き残ったのである。

草創期のリセはまだ全国で三二校しか設置されておらず、大都市はリセ誘致運動に懸命であり、一八一一年にはリセは三六校まで開設されたのである。旧中央学校が設置されていた都市はリセか、すくなくとも公立中等学校一校を獲得することができた。その他の多くの都市や地方自治体^{コムーニティ}も校地や校舎建築補助金を提供して、中等学校の誘致に積極的に運動したのである。

バスンヨシ・バルヂイ・ユリ^ス 私立寄宿学校は中央学校時代に急増していた。なぜなら国家は私立寄宿学校の全寮制度にまったく干渉せず放任していたからである。パリだけでもフロシヨの報告(7, 20)によれば、私立寄宿学校は九〇〇校に達していた。当時はまだ国家は中等教育の独占権ではなくて、監督権をもつことだけで満足していたのである。それゆえ、もし中等学校^{エコール・スゴン}という名称さえ要求しなければ、私立学校^{エコール・フリベ}を自由に設置することができたのである。

フランス全国の私立寄宿学校長は生徒募集の手段として、中等学校としての認可を獲得するために、知事や官公庁当局者の学校視察を要望していた。一八〇六年のフルクロワの報告(7, 20)によれば、二カ年間に公立中等学校^{コレージュ}三七〇校(生徒数二二、〇〇〇人)、私立中等学校三七七校(生徒数二七、〇〇〇人)が設置され、そのほかに中等学校という名称をもっていないけれども、初級ラテン語教育を行なう準中等学校の私立学校四、五〇〇校(生徒数二五、〇〇〇人)も設置されていたのである。

リセ誘致運動は大都市間で激しい競争となっていた。オルレアン市はトゥール市との競争に勝つために五万フランの負債を可決しリセ誘致に成功している。ナント市はレンヌ市と激しく競争し、知事がリセ誘致運動の先頭に立ったのである。ピレネ低地地域のレスカル市は広大な土地を無償でリセ誘致のために提供した。ポー市は政治家の奔走によってリセ誘致に成功している。政治的有力者の介入はリセ誘致運動に効果をもたらしたのである。法律上の手続き面からみると、一八〇二年から一八〇三年にかけて設置認可を得たリセの実際の開校は数カ年遅れて一八〇六年から一八〇八年にかけてであった。新設リセは直ちに国家が選定した寄宿給費生の一部を収容した。

政府はリセにおける宗教教育の振興によって、父母の信頼を獲得し、授業料自己負担生徒を募集しようとしていた。すでに一八〇二年一月一〇日のローマ法王との和親協約^{コンコルダ}によって、宗教と学校との緊密な提携関係が図られるよう

になっていた。レンヌのリセ設置趣意書には、「実践道德の基礎は宗教とカトリック信仰である」(7, 21)と明記されている。ベルサイユのリセでは牧師と教師は校内に居住し、父母の信頼を得るために、とりわけ牧師は生徒の訓育の中心となつて、生徒ともつとも頻繁に接触することが期待されていた。しかし、このような期待にもかかわらず、授業料負担生徒は国公立中等学校へはなかなか集まらなかったのである。

それゆえナポレオンにとっては草創期の国公立中等学校へ有産市民階級の子弟を吸収するための具体的な措置をとることが、緊急に必要であつたといわなければならないのである。そのうえ、圧倒的に多数の私立寄宿学校は粗製濫造のために、学識や人格からみて未熟な教師や自習監督者までも雇用していた。それゆえ、革命期以前のイエス社教団立中等学校のように、共通の精神と健全な伝統をもった真の教師団体の設立が、世論によって要望されていたのである。シャプタル(Chaptal, J, 1756—1832)はオラトワール教団の復興を提案していた。フルクロワもオラトワール教団、教理教団ドクトリナールおよびベネディクト教団の復興を提案した。ルブランは世俗人教師団体の組織化を要望した。ナポレオン自身は、もしイエス社教団がローマ法王庁にではなくて、パリ宮殿に忠誠を誓約するのであれば、全面的に支持するという意向を示していた。

四 帝国大学学校教育団体の設置

第一帝国政府は前代の執政官政府のように、用心深い低姿勢政策を取る必要はなかった。それゆえナポレオン皇帝は新興有産市民階級の子弟を自己の直接支配下に掌握するために、一八〇六年五月一〇日に帝国大学ユニベリテ・フアンベルグ学校教育団体設

置法を議會に可決させたのである。

この大学学校教育団体設置法はわずか三カ条から成っており、(一)帝国大学学校教育団体の名で帝国全土の公教育を独占担当する団体を設置すること、(二)この教師団体の職員は暫定的な特別公民としての義務を契約すること、(三)教師団体組織法は一八一〇年の議會に提出することが規定されていた。

この教師団体組織法は一八一〇年を待たずに、一八〇八年三月一七日の勅令によって制定され公布された。この勅令によって、すべての初等、中等、高等の全段階の学校は、帝国大学学校教育団体とは別個に、またその總裁グランド・マスターの認可なしに設置できなくなり、さらに何人であっても、帝国大学学校教育団体の一員であるか、または帝国大学学部から学位を授与された者でなければ、学校を開設したり、公的に教育することはできなくなったのである。

帝国大学学校教育団体は国立中等学校ならびに革命期以前と同じようにコレージュと呼ばれるようになった公立中等学校を直接に管理することになった。私立中等学校は存続を許されたが、嚴重な監督下に置かれることになった。

私立中等学校は、(一)公立中等学校と同じ程度の教育を行なう学校を学院フンステイション、また(二)学院よりは低い程度の教育を行なう学校を寄宿学校ペンシオンと二種類に区分された。なお私立中等学校としての認可を受けるためには、(一)視学官の監督を受けること、(二)自校生徒の中で大学入学資格学位希望者については、大学学校教育団体の管轄下にある国立中等学校リセの修辞学級または哲学級に編入学させて履修させること、(三)大学学校教育団体に年賦金を支払うことが条件となっていた。

一〇年間の予定で總裁によって交付される免状の交付料として、寄宿学校教師から地方で二〇〇フラン、パリで三〇〇フラン、また学院校長フンステイションから地方で四〇〇フラン、パリで六〇〇フランが徴収されたのである。

大学学校教育団体側の報酬は莫大であった。その報酬は、これらの私立中等学校生徒の年間授業料総額の二〇分の

一にまで増大したのである。しかも、この納付金は寄宿生だけでなく、通学生や準寄宿生に対しても引き下げられなかったのである。

一八〇〇年の時期に、議會は国庫の歳入不足とは関係なしに、別の財源から公教育費に充当したことがあった。そういう事情もあって、帝国大学学校教育団体の財源として、国庫の歳入とは別わくの予算を確保しようということになって、私立中等学校を対象とした納付金制度が採択されたのである。

しかし、この措置は帝国大学学校教育団体に対する反感を惹き起こすことになった。もし国庫の一般歳入から公教育費を支出するようにしてあれば、だれからも反感を持たれないで済んだと考えられるのである。それに反して、競争相手の私立学校長などが帝国大学学校教育団体に直接に支払う免状交付料は、国家の教育独占措置に対する反感を強めさせることになったのである。この免状交付料徴収の当初の目的は、帝国大学学校教育団体の幹部職員の報酬に充当することだけにあったのである。したがって有産市民階級の人びとにとって、この免状交付料徴収措置は、一八四八年の第二共和国政府が農民に課した四五サンチーム税と同じように評判が良くなかったのである。

大学学校教育団体の行政組織の頂点に総裁ジャン・イストルが居り、大学学校教育団体評議員会がその補佐機関である。初代総裁としては、聖職者、文学者、教育者として令名のあったフォンタヌ (Fontane, L., 1757—1821) が任命されたが、それは、「ナポレオンが聖職者を通じて青少年の心をつかみ、かれらを皇帝政府の味方にしようとした」(4, 131) からである。評議員会は終身評議員一〇人と任期一カ年間の再任可能な普通評議員二〇人から構成されていた。終身評議員は督学官アン・スベクトゥール・ジュネローと大学区総長の中から、また普通評議員は視学官アン・スベクトゥールと学部教授の中から任命された。この評議員会は教育立法の立案や法令の執行にあたって強力に活動した。督学官は総裁と地方大学区総長レクトゥールの間の連絡調整を担当していた。

なお大学区フカデミは教育行政単位であるが、おおむね高等裁判所管区に準じて設置された。大学区総長の任期は五年であるが、再任可能であり、補佐官として大学区視学官アシスクリール・ダカデミ一ないし二人、また諮問機関として大学区評議員会コンシユム・ダカデミを持っていた。大学学校教育団体の職員はすべて、その職務ごとに大学入学資格学位バカロレア、学士号リドンヌ、博士号ドクトラを取得していなければならなかった。かれらは大学学校教育団体の法規を遵守し、また皇帝への奉仕と教育の利益のために、総裁が下したあらゆる命令に服従しなければならなかった。総裁による正規の退職許可なしに、無断で教師団体から脱退した者は、いかなる公職にも就職できないことになった。なお大学学校教育団体評議員会のみは、重大な法規違反者に対して、懲戒裁判所としての権限を行使して、免職解雇処分を行なうことができた。

現職教授の地位は臨時の暫定措置によって保証された。一八〇八年九月一七日の勅令は一八一五年一月一日以降でのみ学位条件を満たしてよいとされた。一八一五年までは、「公教育の職務に一〇カ年従事した、すべての個人は、総裁から自己が遂行している職務に相当する学位免状を取得することができる」(2, 25) ことになったのである。

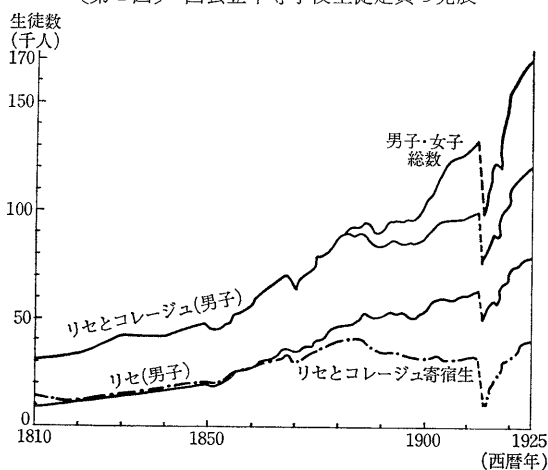
ベルサイユの国立中等学校リセ長から帝国大学学校教育団体総裁に提出された学位免状申請の実情は、つぎの通りである。初級学年担当教師は大学入学資格学位免状を請求している。数学担当教授は理学士号、また副校長ヴァン・スールは文学大学資格学位、文学士号、文学博士号の三つをあわせて請求している。校長自身も「これまでこれらの学位を取得する機会に恵まれたことはなかったが、みんながそれらを請求するのであれば、わたくしもまた請求したい」(7, 26—27) と述べている。

国立中等学校教授養成所である師範寄宿学校の生徒募集は競争試験によるとされた。しかし実際には一八一〇年に師範寄宿学校の第一期生三八人が、簡単な試験後に督学官の指名によって入学した。

〔第1表〕 フランスにおける国公立中等学校の創設以降50年間の発展状況

国立中等学校 (リセ)				公立中等学校 (コレージュ)		
西暦年	学校数	生徒数	無償生徒数	西暦年	学校数	生徒数
		(人)	(人)			(人)
1809	35	9,068	4,199	1809	273	18,507
1811	36	10,926	4,008	1815	323	19,320
1813	36	14,492	3,500	1830	332	27,308
1829	36	15,087	1,600	1849	306	31,706
1847	54	23,207		1855	244	32,500
1866	74	34,442		1866	251	33,038

〔第1図〕 国公立中等学校生徒定員の発展



一八〇八年三月一七日の勅令によれば、国立中等学校の校長などの管理職者と自習監督教師、公立中等学校の校長と教師は聖職者と同じく独身者であり、生徒との共同生活を義務づけられていたが、この規定の施行の実情は明らかでない。しかし実際には新設の国立中等学校長と公立中等学校長には、父母の信頼を得るために、しばしば教師であるとともに牧師である人が任命されていたのである。

国公立中等学校教授陣が年とともに整備されていくにつれて、家庭の父母も子弟を送りこむようになって行ったの

である。第1表（8, 596）は、国立中等学校と公立中等学校が一八〇九年の創設以降の五〇年間にわたる發展狀況を示したものである。なお第1図（6, 472）は国公立中等学校の約一世紀間にわたる生徒定員の發展狀況を示したものである。

五 第一帝國政府時代における中等教育制度

フルクロワは六カ年間にわたって公教育行政を担当したが、帝國大學学校教育団体の初代總裁に任命されたのはフォンタヌであった。フォンタヌ總裁は民主主義への恐怖心とともに、宗教の教育のおよび社会的な価値への愛着心を持っていた。しかしかれは詩人でもあり、ナポレオン皇帝に対する忠誠心も深かった。かれの教育行政は皇帝の統治方針に忠実であったが、高級官僚の精神の独立と自由を持っていたかどうかは明らかではない。かれは洗練された社交人であり、有能な野心家であり、シャトーブリアンの友人であった。

かれは大學学校教育団体評議員会に保守主義者を評議員として招こうとしていた。評議員のアンブロワズ・ランドユとグノー・ド・ムシは旧王党派であり、フランス教会派の敬虔なカトリック信者であった。エメリはカトリック・シュルピス派の精神の代表者であった。しかし、かれは伝統と權威を尊重する人であり、旧教派とも協調した。

これらの保守派の人びとはナポレオン皇帝を支持したのである。とりわけランデュは第一帝國政府滅亡後も三〇年間にわたって、評議員であったことを誇りとしていたのである。かれらは革命以前の狀態を当代と和解させるべく努力していたが、とりわけ公教育に対する國家の監督權を強化しようとしたのである。そのために公教育の主要な地位

に旧制度と教会の支持者を就任させたのである。紳士は帝国大学学校教育団体内部で優遇された。教育職の紳士は、当代のフランスを悩ませていた雰囲気とは異なる「快適で自由な雰囲気」(7, 30)の中で平穩に生活することができたのである。それゆえ中等教育界では、当初から教師相互の信仰の自由が慣習となっていたのである。

フォンタヌ初代総裁が選任した大学区総長は次のような顔ぶれである。ボルドーではルイ一四世の顧問弁護士の人セーズが任命された。ポーではスペインへの亡命者であり、第一共和国時代時に法律的宣誓を拒否したエリサガレ牧師が任命された。かれは革命反対者であり専制主義的な教育行政官であった。カーンとアレキサンドルの大学区総長はブルボン王家に忠実な旧教徒であり、モンテスキュー学徒には寛容であったが、国家による公教育独占政策を支持していた。フォンタヌ総裁は新教徒を大学区総長に任命することには好意的ではなかったのである。

リセ教員募集は当初は所定の採用手続きが整備されていなかった。教員志願者は督学官の地方出張時に、直接の面接審査を受けた。フルクロワは一八〇三年にナントのリセ新設にあたって、視学官を派遣した。その時に、かれは知事に次のように通知している。「貴職はリセ生徒が試験を受験するのを準備すると同時に、リセ教員志願者が視学官による教員採用試験を受験するように告示しなければならない。」(7, 31)このようなリセ教員採用の慣行は、第一帝国政府時代を通じて行われた。キュビエ (Cuvier, G., 1769—1832) はリセのラテン語担当教員募集にあたって審査を担当した。受験者は旧制度時代にコレージュや教会経営中等学校の元校長や元教師であったと自称していたが、実際にはホラチウスのラテン語詩の一節もほん訳できなかったといわれている。幸いなことには、当時、旧中央学校教員経験者が多数居ったことと、私立寄宿学校の現職教員の中から国公立中等学校教員への転勤希望者が多かったのである。したがって当初には中等学校教員志願者を申込先着順で採用する慣例であったが、後には所定の選考手続き

にしたがって採用されるようになったのである。

ベルサイユのリセはカロンを採用しているが、かれは優秀な教師であり、元司教、家庭教師を経て、セーヌ・エ・オワズ中央学校教授経験者であった。オルレアンのリセでは元主任司祭の教授が数人採用されており、既婚者も含まれていた。ポワチエでは、元中央学校教授四人がリセ教授に採用された。その中のフラダンは一七九一年にポワチエの旧コレージュで哲学担当教授であったのである。

したがってリセ草創期では、督学官は全国到る所で聖職者と世俗者、また護憲派教師と第一共和国時代の宣誓拒否教師を差別しないで、広く一般から中等教育経験者を公募したということができるのである。もちろんリセ教員募集状況はその後少しずつ変化していつて、既婚聖職者は敬遠されたりすることもあったが、一般的には「国立中等学校教授の地位はあらゆる宗派や党派の人びとに公平に開放されていた」(7, 33) ということができるのである。

しかしリセ校長職の人事選考方針は、教員の場合と比べると排他的であった。旧中央学校は旧教徒家庭からの不信感に包まれていたので、それを一掃するために、新設リセの校長にはしばしば牧師が任命されたのである。また政治的立場では、旧護憲派コンスタブルよりも旧反動派レファクトールの人びとが好ましいとされたのである。パミエ市議会はリセ校長として既婚教師の受け入れを拒否している。ファレーズ公立中等学校校長は革命期における反動派であり亡命者エミグレであった。ノジャン・ル・ロトル公立中等学校校長は元牧師モンデジルであった。アール中等学校校長も旧反動派の人であった。この校長は教論レクシオンとして二人の護憲派教師を採用しようとしたが、政府は任命を拒否した。しかし国公立中等学校校長には、かならずしも聖職者に限られず、一般の世俗者も多数任命されたのである。すべての国公立中等学校校長は生徒に礼拝行事に参加することを要求したのである。

フォンタヌ総裁は旧宗教と同じく旧教育の伝統も尊重した。なぜなら第一帝国政府の基盤にゆさぶりをかけようとした人びとは、つねに旧教育原理を非難したからである。

有産市民階級はジャコバン主義と中央学校に対する反動から、ラテン語による礼拝を復活させた。かれらはその子弟に、旧イエス社教団寄宿学校生徒が身につけていたような教養を育成しようと望んでいたのである。バンドーム公立中等学校長は、一八〇五年に父母の要望に應ずるために、旧コレージュの教育課程に忠実であったことを誇りとしていた。

伝統的な旧教育方法の維持とは、具体的には科学^{サイエンス}を文学^{レットル}の犠牲に供することであった。科学はジャコバン党から支持されたために、保守党の人びとからは嫌われたのである。当代のフランスでは科学はジャコバン党と同一視されて、はなはだしく人気がなかったのである。それゆえ、そのような世論を啓発するために、キュビエは、科学は宗教や公共の秩序に対してなんら危険なものではないという趣旨から、「科学と文学の調和的な結合」(7, 34)を要望したのである。

キュビエの提案が承認されることによって、一八〇二年の中等学校教育法令の中で、国公立中等学校的主要教科としてラテン語と数学が指定されることになったのである。それゆえ一八〇二年の教育課程では、ラテン語科と数学科はそれぞれ別個に編成されていたのであるが、一八〇九年の教育課程では、ラテン語科だけで編成されることになり、文学が優位を占めるようになったのである。

一八〇九年の中等学校規則によれば、初等教育^{エラス・プリモール}段階学級修了後の中等教育段階学級は、文法学級二カ年、古典人文学級二カ年、修辞学級一カ年、数学^{マテマティクス}専修学級一カ年の合計六カ年制で編成されていた。大学区本部事務局所在地のリ

セは、さらにその上級学年として、高等数学級と哲学級を用意していなければならなかったのである。

もはや校内でラテン語を話す必要はなくなっただけども、仏文ラテン語訳、ラテン語文仏訳、ラテン語講読、ラテン語詩文は、教師と生徒が世評を高めるための演習科目となつたのである。ナポレオン皇帝は一八一一年にラテン語演説会を開催し、優勝者は金メダルを授与された。一八一二年にビルメンはフラン語文を書くためには古典語著作家を理解する必要があるという理由から、ラテン語演説を復活させた。リセ生徒自身、修辞学優等賞は中等教育の完成目標であると考えていたのである。リセの教師にとつても、ホラチウスの名訳をすることは最高の喜びであつたのである。フォンタヌ総裁も修辞学そのものの価値に対しては醒めた眼をもっていたが、好意を示したのである。

リセでは、一八〇九年まではフランス語演説が名誉ある地位を占めていた。ラテン語演説授業は一八一五年以後にしか行われなかつた。その後、フォンタヌは修辞学をラテン語に従属させることにしたのである。しかし教師の側では、文学教養とラテン語仏訳への愛着、また主題の取り扱い方法などから、生徒に対してはなるべくフランス語で作文するように指導したのである。修辞学担当教師ビルメンは、生徒が明確で簡潔な文体で作文できるように指導したが、その教え子のミシュレは後年になって、修辞学授業に感謝の念を表明している。

哲学級は中等教育の最上級学年として復活した。一八〇二年の哲学級教育課程は論理学と倫理学の二教科だけであつた。間もなくナポレオンは哲学級授業を帝国体制維持のための思想善導装置として利用できるように気づいたのである。旧パリ大学教授モグラなどがサント・バルブ校で行つた哲学授業は多大の成果をあげたために、政府はモグラを帝国リセ教授に任命し、他のリセはモグラ教授を模範とする授業を行う措置を取つた。

しかし当代のリセでは、生徒の大多数の者は修辞学級へ進級しなかつたし、またごく少数の生徒しか哲学級へ進級

しなかったのである。一八一八年にロワイエ・コラル (Royer Collard, P., 1763—1845) 文相は哲学級を優遇する措置を取った。哲学級担当教師はラテン語またはフランス語のいずれかを選択して授業できるようにしたのである。歴史と地理は教育課程から姿を消した。図画も旧中央学校で占めていた優遇を失い、選択教科となった。現代外国語は主要必須教科からはずされ、選択教科になった。親は適当と判断した時にのみ、現代外国語の授業料を支払ったのである。

数学は主要必須教科の地位を獲得した。物理学と博物学は大多数の生徒の履修対象からはずされたのである。

世人は、このようなリセの教育課程に対していちおう満足していた。しかし少数の識者はその欠陥に気づいていた。一八一六年にギゾ (Guizot, F., 1787—1874) はリセの教育目標がきわめて限られており、社会と時代の要請に応じうるような教育内容を欠いていると批判したのである。

訓育面では、リセは「全寮制度」(3, 130)の学校であり、訓育を重視して、軍隊生活に準備することを目指していた。青少年を秩序と服従に習慣づけることが問題であった。リ

〔第2表〕 ニオル公立中等学校 (コレージュ)
における日課表

5:30	起床
6:00	自習
7:30	朝食 (沈黙したままで)
8:00~10:00	授業
10:00~11:30	自習
11:30~12:30	書き方
12:30~ 1:15	昼食 (沈黙したままで)
1:15~ 2:00	休憩
2:00~ 3:00	自習
3:00~ 5:00	授業
5:00~ 7:00	おやつ・自習
7:00~ 7:30	休憩
7:30~ 9:15	夕食
	休憩
9:15	夜のお祈り

セ生徒は、「軍隊における未来の将校」(7, 39)に養成されることになったのである。それゆえ旧イエス社教団修道院におけるような生活規律が尊重されたのである。第2表のニオルの公立中等学校の日課表(7, 39)が示すように、国公立中等学校はあたかも兵營であると同時に、修道院であるかのような観を呈していたのである。

生徒は、一般の人びとが政府の法律を遵守し、善良な風俗習慣などの秩序に従わなければならないのと同じように、校則をわきまえて厳格に実行するとともに、義務と徳と礼儀と理性に反することを行ってはならないと訓育されたのである。昼食時には道徳講話が行われたし、また生徒は食事中は黙ったままで食事し、手振りで注文し、あまり給仕人に面倒をかけないようにと躰けられたのである。

このような軍国主義的傾向は執政官政府の初期の頃はまだそれほど優勢ではなかった。ナポレオン執政官はまだフランスに平和をもたらす使徒と信ぜられていたのである。リセ生徒もどちらかといえば学業の方に専念する気風の方が強かったのである。フランスは、「軍隊、科学、芸術においてと同じく文学においても世界第一位でなければならない」(7, 40)と考えられていたのである。革命期の混乱にともなう中等教育の一時的中断による空白を一日も早く埋めなければならぬと考えられていた。そのために、政治家も学業優等生を秘書官や随員に雇用することによって、中等教育を奨励したのである。

しかし第一帝国政府時代になってからは、ナポレオン皇帝は戦争を決して終結させようとはしていないということが判明したのである。そこでリセ生徒の親たちは、その子弟が兵役の苦勞に耐える力を身につけることができるようにするために、体育授業を受けさせることにしたのである。エニール・ポリテクニク理工科学校やフォンテンブロー校(後のサン・シール陸軍士官学校)への進学は、兵士としてではなく将校として戦争に従軍するために奨励された。

しかし一般には未来の軍隊将校に予定されていたリセ生徒は、学問をあまりやりすぎない方がよいと考えられていたのである。そのような精神的雰囲気が一九一五年から一九一八年頃までの国公立中等学校生活にみなぎっていたのである。

それゆえ訓育はきわめて厳格であつた。リセ・ルイ大王校の校長は生徒に対して厳格な教育を行うと宣言した。当代のバンドーム中等学校生徒バルザックの学校生活の回想（「*ルイ大王校*」）は、次に示す通りである。

学校のすべての生活が修道院的画一主義であつた。校外との関係はまったく無かつたし、通信も無かつた。ただ特定の日だけ親に手紙を書くことが許された。自習室には不潔な臭氣が立ちこめていた。教室では、宿題をやつて来なかつた者や、授業を怠ける者に体罰が行われた。教師に無礼な言動を行つた者は、皮製か木製のむちで打たれたのである。

リセ・ニース校では質実剛健な校長の指導のもとに、五〇人から六〇人の生徒が在学していた。ほとんどの自習監督教師は聖職者であり、生徒は毎日自分で寢床をたたみ、衣服と履物にブラシをかけた。教室ではまったく管理を心配しなくてもよい教師が愛想の良い物腰で姿を見せた。メイエ・ラコスト教授は美的心情をもつた古典人文学者であつたが、ミラボーの演説文やルソーの文章と同じく、古代の古典著作家の文章も説明した。当代の同校の生徒ブランキは、「この謹厳尚武の教育によつて、生活の辛酸を舐めつくして鍛えあげられた」（「*リセ・ニース校*」）と回想しているのである。

このような軍国主義教育に恐怖心を抱いた親は、旧中央学校時代に新設された私立寄宿学校を選択した。当代における多くの私立寄宿学校は専ら商業主義的な学校であつた。それらの学校はあまり信用できない人を教員として採用していた。パリの私立寄宿学校を視察した視学官は、二カ年間に約四〇〇人の教員の免職処分を命じている。免職理

由は無知と操行不良であつた。

これらの私立寄宿学校の実態はまったく小学校と同じであつたにもかかわらず、中等学校という儲かる看板を掲げるために、ラテン語初歩を教授したのである。しかし、ごく少数の私立学院では一流の教師によって指導されていたのである。

テアト派修道士で元コレージュ教師ビクトール・ド・ラノは、新思想に共鳴して市民憲法の遵守を宣誓した。一七八年から一八〇〇年にかけて、かれは旧コレージュ・ド・サント・バルブ校の生徒の一部を、初めは中央学校、また後にはリセの授業に出席させることによって、同校を実質的に復興させたのである。ラノの威厳と生徒への献身、また卓抜した指導力はフォンタヌなど公教育当局者によって賞讃された。そのためリセ・ド・シャルルマーニュ校は遠隔地にあつたにもかかわらず、自校生徒に良好な学習習慣を身につけさせるために、ラノの指導した生徒の派遣を要請したほどである。

それに反して、一八〇四年にコレージュ・スタニスラ校を設置したリオタールは革命反対論者であつた。同校では宗教科が第一位を占めて、コレージュ全体に宗教的雰囲気のみなぎっていた。授業は旧式のままであつた。同校は元王党派の親の支持を受けた。リオタール校長は帝国教育行政当局の警戒心を巧みに避けながら学校運営に當つたのである。

パリと同じく地方都市においても、私立寄宿学校は急増した。私立寄宿学校の実態は最上等学校から最下等学校まで極端な隔差がみられた。リオンの私立寄宿学校は視学官から教育改善の勧告を受けている。ルーアンの私立寄宿学校の数校はリセと同格の力量をもつ学校として認められていた。私立寄宿学校長は自校の文学中心の家族主義的な学

校生活と、国公立中等学校の兵營同然の生活との違いをきわ立たせることに経営の重点を置いたのである。

それゆえ一八一〇年に帝国大学学校教育団体総裁が私立寄宿学校に対して、軍事教練を必須教科として採択することを命じてきた時には、衝撃がきわめて大きかったのである。リオン私立寄宿学校は総裁通達を巧妙に回避する対策を講じた。それは、私立寄宿学校の校舎をリセから遠隔の地に移転させることによって、毎日四回も軍事教練を行うことを事実上できないようにしたのである。しかし、総裁通達は一般にはとにもかくにも実施されたのである。リセ校長と私立寄宿学校校長は軍事教練などの授業に対する共通の関心を持つことによって相互に友好な関係を持つようになったのである。

アン・デ・シヨンプリベ プテ・ゼミナール
私立学院よりも神学校の方がもっと国家統制から自由であった。すでに一八〇二年十二月一日のローマ法王との和親協約^{コルダ}によって、宗教団体と国公立中等学校との緊密な提携関係が図られるようになっていた。

帝国大学学校教育団体評議會は一八〇九年の規則によって、聖職者養成を目的とする中等学校に特典を与えている。バルスロネット校は公立コレージュであったが、神父養成教育^{プレートル}を行つたのである。教会立サン・マロ中等学校^{エコール・スゴンデル}は公立コレージュに移管された。サン・オメル校の牧師ボワイオン校長は神学校生徒を公立コレージュの授業を聴講させるために派遣している。

このように神学校と公立コレージュとの間には相互交流がみられたが、神学校は国立^{リセ}中等学校の強力な競争相手となったのである。なぜなら神学校は聖職志望者だけでなく、一般の生徒の入学も歓迎したからである。

国公立中等学校の教育方針はカトリック派の戒律の尊重を定めていたが、親の信頼を得ることはできなかったのである。親は国公立中等学校ではカトリック派の戒律が厳しく守られていないのではないかと懸念していた。

このような宗教的理由のほかに、教育的理由も加わっていた。一八〇九年にオルヌ県知事は報告している。「公立コレージュはあらゆる方面において私立中等学校に劣っている。公立コレージュ教育は数学と歴史を禁止されたために、ラテン語と神学だけに縮小されてしまったのである。」(T, 46)

それでも公立コレージュは兵役免除の特典を看板に掲げることによって、他の私立中等学校に多大の迷惑をかけながらも、急激に増加していったのである。神学校は帝国大学学校教育団体に対する納付金支払いを免除されていたために、生徒の寄宿舎費負担額は少額で済んだのである。そのうえイエス社教団関係の聖職者教師も再び中等教育界に姿を見せ始めていたのである。

ナポレオン皇帝は国公立中等学校と私立中等学校や神学校との競争状況の実態調査を警察大臣を通じて知事に委嘱した。その結果、それらの競争が行き過ぎていることが判明した。

かくして一八一一年一月一五日の勅令によって、教育の国家独占措置が完全を実施されることになったのである。私立学院は自校生徒をリセかコレージュへ派遣しなければならなくなったのである。そのうえ私立学院は寄宿生一人当たり単位校地面積に満たなければ、九歳以上の寄宿生を収容することができないようにされたのである。かくして全国各県において、同じ市内のリセかコレージュへ、自己の生徒が徒歩で通学できる地域にある教会立中等学校しか存続することができなくなったのである。

この苛酷な勅令公布の結果、大多數の教会立中等学校は閉鎖せざるをえないようになったのである。ソレズとジュイリの教会立中等学校はリセに移管されることになった。ラノ校長が経営しているサン・バルブ私立中等学校もリセへの移管が問題となった。しかしラノの友人の聖職者やフォンタヌ総裁の尽力の結果、帝国大学学校教育団体による

教育独占措置は決して完全に実施されたということではないのである。ともあれ国公立中等学校側は皇帝の教育独占政策に対して全面的支持を表明したのである。

帝国の官僚階層の家庭出身の国立中等学校給費生は、「皇帝の人格に対して自分の親に対すると同じような親愛感」(7, 48)を抱いていたのである。

しかし有産市民階級の上層部は、国立中等学校の寄宿舎生活に対して嫌悪感を持っていた。かれらは、その子弟が戦争経験者と交際したり、職業軍人志望の給費生の無作法なふるまいに感染することを怖れたのである。

そのために帝国大学学校教育団体当局は、コンデ国立中等学校長に元説教師のシャンボ牧師、またリオン国立中等学校長にノンペール・ド・シャンパーニ牧師を任命して、親たちの不安を一掃しようと試みたのである。

そのような当局の努力にもかかわらず、大都市では国立中等学校へ授業料負担生徒はなかなか集まらなかった。ある。クールノによれば(7, 48)、スペインとロシアの戦場へ一〇万人の新規募集兵を派遣することの方が、国立中等学校へ家庭の信用を得て生徒を入学させることよりも容易であったといわれているのである。

参考文献

- (1) Durkheim, E., *L'évolution pédagogique en France* II, 1938.
- (2) Probeta, J. B., *Le baccalauréat*, 1937.
- (3) Ponteil, F., *Napoléon Ier et l'organisation autoritaire de la France*, 1956.
- (4) ditto, *Histoire de l'enseignement en France*, 1966.
- (5) Prost, A., *Histoire de l'enseignement en France 1800—1967*, 1968.
- (6) Mayeur, F., *Histoire générale de l'enseignement et de l'éducation en France* III, 1981.

- (7) Weill, G. W., Histoire de l'enseignement secondaire en France, 1921.
 - (8) Cubberley, E. P., The History of Education, 1948.
 - (9) 渡辺 誠『コンドルセ』(岩波新書) 昭和二十四年
 - (10) 宮脇陽三『フランス大学入学資格試験制度史』風間書房 昭和五六年
- 【備考】文中の()内の数字は文献番号と文献の引用頁数を示す。